

言語聴覚士は療育園の療育においてどのような役割を担えるか
～療育園指導員が在籍児に言語検査を実施する支援を通して～

【目的】

浜松市根洗学園の松本園長から指導員に「ことばの発達」に関する研修をしてほしいと保健福祉実践開発研究センターに依頼があったので、指導員の有志を対象として2011年度は3回研修会を開催した。指導員から子どものことばの発達を促すための軸がないという声が聞かれたため、研修会では言語検査「国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査」の概要と言語検査結果に基づく子どもへの支援方法について説明した。その後、松本園長から「学園として指導員にことばの発達を促す軸を持って療育をしてほしい」と言う要望があり、本研究を立案した。

本研究では、指導員が言語検査を実施できるようになり、検査結果を活かして療育プログラムが作成できるようになることを目的とする。指導員は言語発達の軸を持つことで、子どもを療育園に預けている保護者への助言や子どもが所属する保育園・幼稚園の先生に対して適切な助言をすることができるようになり、信頼関係が深まるとともに子どもはいろいろな場面で適切な言語刺激を受けることができ、言語発達がより促されることが期待できる。

【方法】

<第1研究>

根洗学園として全職員にことばの指導についての不安、困り感についてのアンケート調査を実施してもらい、言語聴覚士へのニーズを把握していただき、言語聴覚士の介入方法を検討する。その際に言語検査の習得を希望するかについての意向も合わせて調査する。アンケートの対象は常勤職員23名。

<第2研究>

①第1研究で「ぜひ言語検査を習得したい」という方を対象として「国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査（言語検査）」の講義、演習を行う。②その後、自分の担当クラスの中で検査の対象となるお子さんを選定し、言語聴覚士立ち合いのもと言語検査を実施する。③検査結果の算出、指導プログラムの立案については言語聴覚士が個別に対応する。④担当ケースのお子さんに対して言語聴覚士立ち合いのもと個別指導を行う。④言語検査を習得、実施したことは日々の療育にどのような影響があるかについて個別でインタビュー調査を実施する。

【結果】

<第1研究>

アンケート調査の一部を抜粋

1) 療育を大変だと感じていますか（図1）：約60%が「とても大変」と感じている。

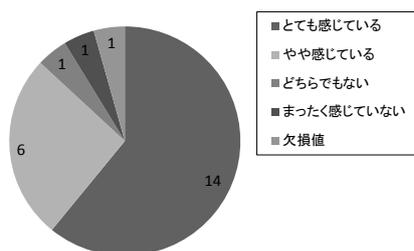


図1 「療育は大変だと感じていますか」

2) 療育の中でことば・コミュニケーションの指導に不安はありますか (図 2) : 約 70% の人が不安と感じている

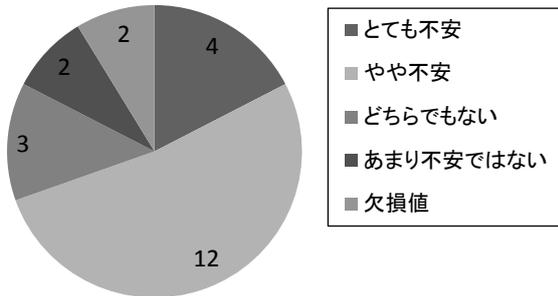


図2 「ことば・コミュニケーション指導に不安はありますか」

4) 保護者と子どものことばの発達についてやりとりすることに不安はありますか (図 3) : 約 70% が不安と感じている

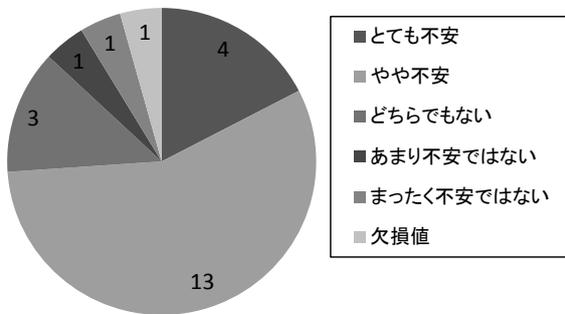


図3 「保護者とお子さんのことばについてやりとりする不安」

4) 自分なりのことばの発達の「ものさし」は持っていますか (図 3) : 約 50% の人が「持っていない」と返答

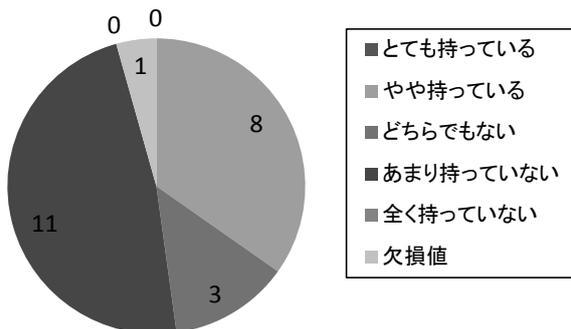


図4 「自分なりのことばの発達のものさしを持っていますか」

5) 言語・コミュニケーションに関する知識を学びたいですか（図 5）：約 90%の人が「学びたい」と返答

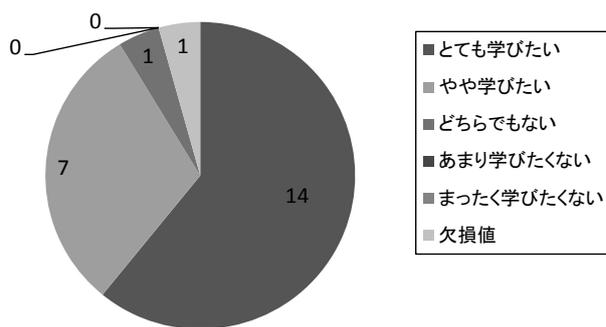


図5 「言語・コミュニケーションに関する知識を学びたいですか」

6) 言語検査の習得を希望しますか（図 6）：約 80%が希望した。

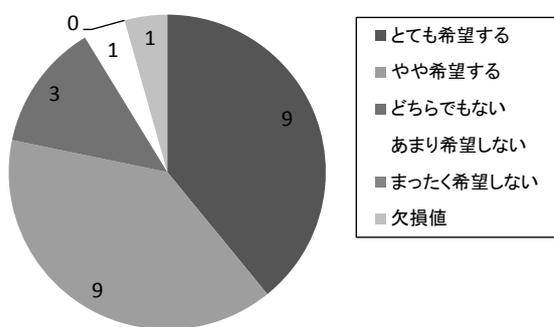


図6 言語検査の習得を希望しますか

【まとめ】

アンケート調査より療育園の指導員は言語・コミュニケーションに関する指導に不安があることが明らかとなった。その1つとしては指導の軸となる発達のものさしがないことが挙げられ、言語・コミュニケーションに関する知識を学びたいというニーズが確認された。言語検査の習得を「とても希望する」人は9名であった。この結果より言語聴覚士は療育園において間接的に専門性を発揮できる役割があることが明らかとなった。

現在までに約6名の指導員を対象に言語検査の習得に向けての研修会を4回開催した。現在、協力児を選定しているところであり、その後、言語検査を実施する予定である。

【学会発表、論文発表の状況】

2014年度のリハビリテーション科学ジャーナルに投稿予定